

合同歌集

新 壑

第四集

にひばり



合同歌集

新
壑
に
ひ
ば
り

第四集

所沢短歌会
(新日本歌人協会所沢支部)

合同歌集「(新墾)にひばり」第四号

定価 四〇〇〇円

発行日 一九九六(平成八)年二月三日

編者 所沢短歌会(新日本歌人協会所沢支部)

発行者 広報センター

埼玉県所沢市有楽町一七一七

電話 〇四二九一二三ー〇一一九

印刷出版 (株)日刊新民報社

序 文

三十余年ぶりに「新壑」第四号を発行いたしました。これも所沢短歌会の組織が大きくなり、レベルも向上してきたためと思います。

当初より「新壑」は新日本歌人協会所沢支部（昭和二十八年）より出されていましたが、その後「所沢短歌会」と改名し新日本歌人協会で活動するときに協会の所沢支部の名ですることもあります。

所沢短歌会は現在約三十名で、その活動はなかなか活発です。その一部分をみても、歌会を毎月開き、二首ずつ投稿された作品をコピーし、全員の投票で合評し、活発な討議をくりひろげます。

・歌会の当日、理論学習のため、教育・名歌鑑賞をしました。
・昨年はバスで吟行会をひらき、学習と懇親をはかりました。

・新年の総会のほかに各種短歌コンクール受賞者の祝賀会などを催しています。

・冠婚葬祭などのおつき合いは会として行い、配偶者と両親と子は香典を、本人の場合、御不幸には歌会で黙祷し葬儀に花輪と香典を送ります。

・機関紙「所沢短歌」も毎月発行し、原則として手渡しで会員に、郵送で全国の友好歌会・歌人に送ります。

・日用品を買うとき、できるだけ会員の商店から購入し、また日常生活相談もしております。

・「所沢短歌連盟」、「所沢歌壇」、「三ヶ島葎子の会」などとお互いに交流し、市民短歌大会・勤労者短歌大会（山畑が毎年副会長をつとめている）三ヶ島葎子の会などに積極的に参加しています。「所沢歌壇」は超結社の組織で毎月コンクールを催しているが、所沢短歌会からは新条晴美

・真下慈児・石井美作・荻野徳俊・山畑武雄が選者に委嘱されています。各種コンクールも、毎回本会よりの上位入選が特徴的となっています。当会としては未だ発展途上にあります。不十分な点多々あります。しかし、なんといっても楽しい会なのです。明るくのびのびとして、自分の人生を託しても悔いない会としようと、みんな生き生きした眼で活動しております。

皆さまの御加入を心から期待し、つつしんでここに「合同歌集」を御届けします。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

なお「新墾」刊行にあたっては、ページ数、内容、作風などすべて投稿者の自由とし、掲載順は五十音としました。

一九九六年秋

会を代表して 山畑武雄

目次

序文

東 弘 子	ここに一年間の写真	一
新井利子	ねぎぼうずのうた	七
新井真津子	牡丹花	八
飯村美津枝	心ゆたかに	二〇
石井タネ	母の愛	二八
石井美作	父母・はらからの追憶	三六
石山キヨ	土に生きる	四二
内堀ヨシノ	つわぶきの花	五〇
萩野徳俊	祭りの笛	五八
	安全帽	六四
		六六

越阪部フデ	絆		七二
小暮修子	茶の花		九二
沢田嘉公恵	追憶		一〇〇
白妙幸子	癌で逝きし義父		一〇六
新条晴美	続・ガラスの小鳥		一一四
鈴木敬一(勁艸)	千嘉子		一六〇
鈴木八重	春浅く		一六二
鈴木雪菜	桜の一片		一六四
武澤富子	追想		一七〇
中沢千代	夕暮		一七八
中村巳代子	花		一八〇
根岸ひさし	近詠		一八二
長谷川せい子	ふりむく		一九〇

原田 敏子	月 明 り		二〇〇
平岩 寿々子	思 い 出		二〇二
真下 慈 児	臘 梅		二一四
師岡 ひで	夫 と 吾		二二二
山 畑 武 雄	続・続・道ひとすじ		二三〇
	所沢地方における近代・現代短歌小史（山畑武雄）		三一一
あとがき			三三〇
会員住所録			三三二

題字「新墾」にいはり 石井美作（会員・勤労者文化展の短歌部門・俳句部門でそれぞれ県知事賞を受ける。「所沢歌壇」選者）

表紙の絵「泰山木」 新井真津子（会員・勤労者文化展の短歌部門と絵画部門でそれぞれ県知事賞を受ける。）



ある日の記念撮影(上)と、月例の勉強会の様子

ねぎぼうずのうた

東

弘子

花菖蒲しぼれる藍は母縫いしゆかたの色ぞ若
き日のいろ

ようやくに母の形見の袋帯われになじみて胸
元ぬくし

忘れられず季節の度に口ずさむ父の詠みたる
ねぎぼうずのうた

雨降れば傘にからだを細くして濡らしたくない
昨日の疼き

人恋うる如くになける飼猫の何歳なるかひ
げ一本落つ

久びさに逢いたる友と美容院の鏡の中で笑顔
を交わす

読み終えし文庫本閉づれば虫の声一途に耳の
奥にしみいる

栗の皮むきつつ赤飯の作り方娘に教えしを思
い起こしぬ

郭公の声聞き歩く朝の道惑いのこころ消えゆ
かんとす

かたわらに本読む夫の居りてこそ春待つ宵の
ほのやさしかる

古き家の厨にラッキョウの瓶並び今年も夏の
訪れ確かむ

トラックのわずかな蔭に憩いおる工事の人の
陽焼けし腕

樂しみは若き人らと花をいける三十五年の春
夏秋冬

庭隅にほのと薫れるくちなしの花は雫に揺れ
て夕ぐれ

托鉢僧の唱える経は強風に消されてただにう
なりて聞こゆる

無言にて歩かされたるおもい出の御陵に工事
の音聞こえおる

ふるさとを身一杯にまとい来し従姉は伊万里
の言葉かくさず

海につづく菜の花畑を思いつつ器に挿す一本
いやさびしかる